

平成30年度 富山市民 感謝と誓いの つどい

とき 平成30年8月1日(水) 午後1時30分
ところ 富山市民プラザ アンサンブルホール

主催／富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

- | | | |
|---------------|----------------|---------------|
| 富山市自治振興連絡協議会 | 富山市社会福祉協議会 | 富山市遺族会 |
| 富山市老人クラブ連合会 | 富山市民生委員児童委員協議会 | 富山市児童クラブ連絡協議会 |
| 富山市母親クラブ連絡協議会 | 富山市PTA連絡協議会 | 富山市小学校長会 |
| 富山市中学校長会 | | |

小学生絵画「最優秀賞」



「空飛ぶ車と未来の学校」
富山市立萩浦小学校4年 光主 早希さんの作品

三・四年生の部



「みんなが大好き!水がかががやぐきれいな海」
富山市立新保小学校3年 浜田 桃歌さんの作品

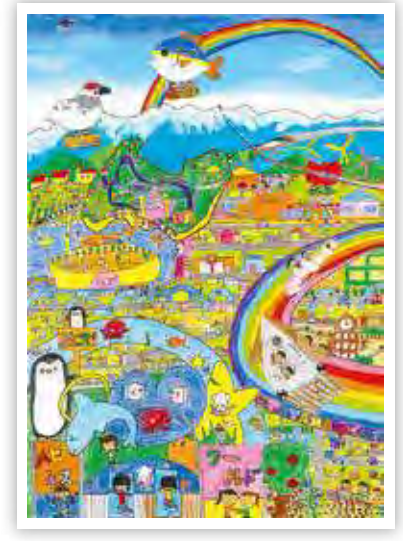
小学生絵画「優秀賞」



「わくわくする小学校」
富山市立呉羽小学校4年 堀 心花さんの作品

三・四年生の部

五・六年生の部



「笑顔、夢、希望にむかって進め!!富山!!」
富山市立新庄北小学校6年 佐渡 優花さんの作品

五・六年生の部



「空の街 富山県」
富山市立熊野小学校6年 清水 かりんさんの作品

五・六年生の部



「未来の富山湾」
富山市立太久保小学校6年 宮川 陽之介さんの作品

富山市のあゆみ展

■日時・場所
7月30日(月) 午前11時～午後6時
7月31日(火) 午前9時～午後6時
8月1日(水) 午前9時～午後4時
富山市民プラザ 2F交流ギャラリー

■内容
富山市の歴史の紹介や、市民生活の変遷を写真等のパネルで展示するほか、小学生が描く絵画「未来の富山市」も展示します。

このプログラムは再生紙を使用しています。

記憶にない富山大空襲だけど

富山市八尾町館本郷 本多 哲三

私は、昭和二十年四月、八尾町で生まれ現在も八尾町に住んでいる。生後三か月となったその年の夏は、八つ上の姉が、富山市の神通川沿いの整形外科に入院しており、母は姉の看病と私の育児に奮闘していたに違いない。

母は、そこで米軍機B29による焼夷弾の投下に遭遇した。大空襲の記事によると、「八月一日の午後十時ごろ、米軍機が富山上空に現れてそのまま過ぎ去った。人々が安心して就寝した直後の八月二日午

前零時ごろ空襲警報が発令され…」となっている。毎年この時期がくると、母は決まってこう話始めた。「飛行機の爆音で目が覚め、左の窓から遠くの火事が見えた。驚いて見ていたが今度は右の窓から近くの火事が見え、パニックになった。」と。姉も私も毎年必ず母から同じ話を聞かされた。そしてその後、私の妻にも語り継がれた。

おそらく、午後十時に米軍機が過ぎ去った時にも空襲警報が発令され、サイレンが鳴り響いたはずだが、母は気付かなかつたのだろう。姉の看病と私の育児に疲れ果て夢の中だったのだろうか。それとも、十六歳で女学校を中退し嫁いできた母は、危機感や恐怖感に対し鈍感だったのであろうか。

当時は、テレビなどの画像報道はなく、ラジオの告知だけだった。勝利宣言ばかり報道されていれば危

機感は無かったであろう。ましてや、二十六歳の純粋な母は、神様仏様が救ってくださると信じ、自分たちが災いが及ぶとは思わなかつたのであろう。

迫りくる飛行機の爆音と鳴り止まぬ警報。母は、その異様さから建物内は危険だと思い、荷物をまとめて病院の外に出たものの、貴重な砂糖を忘れたことに気づき建物に戻ろうとした。その時、姉が危険だと大声で泣き、母を引き止めた。思い留まったその直後、病院は燃え始めたという。母は姉に助けられたと言っていた。

母はそれから、病院の近くに嫁いでいたおばさんの嫁ぎ先に助け求めようと山王町へ向かった。辺りは、大混乱の最中。姉は歩けなかつたため、母は姉を背におんぶし、私を胸に抱いてようやくたどり着いたのだが、間近に迫る火の勢いに、街にいたら危険だからと急遽、八尾へ帰ることになった。

私は母の背に帯でおんぶ、姉はおばさんによつて腕で支える手おんぶをされて逃げ出した。人の波に押し寄せ有沢橋付近で焼夷弾投下の激光に遭い、その衝撃で双方離れ離れになったが、母もおばさんも無事を願ひながらひたすら歩き続けたという。

神通川沿いに逃げる道中に、たくさんの人が熱さをしのぐため川へ飛び込む様子や、流されて行く様子をみると母から聞いたが、あまり多くは語らなかつた。それはきっと、凄まじい地獄絵図だったからに違いない。

「堤防を過ぎてさらに進み、お姉ちゃんの通院のため幾度も通った婦中町「広田」の地名看板を目にした瞬間、助かったと思った。」と語った母の恐怖と安堵が入り混じった語り口が忘れられない。

有沢橋からの逃避行は、ただただ人の波の勢いに乗って歩き続けたという。おそらくそこで休憩をしたと思うが、はぐれた姉とおばさんを思う母の胸中は察するにあまりある。

そんな母は、一昨年九十六歳で亡くなった。最後までおおらかでマイペースな人柄であった。

私は毎年八月一日の花火を自宅周辺で、時には曇っていて華麗さがわからなくても白煙を観る。そこから逃げてきたのか「遠いなあ!」と。そして、よくぞ姉と私を助けてくださったと、亡き母に、そして今も健在なおばさんに感謝し合掌をしている。

終戦から七十三年、私は、三歳の時に家族も覚悟したという大病を克服してからは、ほぼ健康な人生を歩んでいる。

残された人生は、地域活動やパークゴルフなどを一緒にやる素晴らしい仲間との時間を大切に、平和が続くことを願ひながら、健康寿命を延ばして、母と同じくマイペースに頑張っていきたい。

「これからの平和を祈って」

富山市立山室中学校三年

高平 希歩

一九四五年八月一日午後九時五十分から八月二日午前二時二十七分までに起こった、富山の悲劇について、私は実際に戦争を生き抜いた方の講話を聞いたことがあります。その方の講話を聞いてみると、「自分は生きていいのだろうか」、「こんなに自由な日々を過ごして罪はないのか」と、戦後の今と自分について深く考えるようになりしました。

小学校から中学校にかけて、富山大空襲について調べる機会が何度ありました。その中で富山での空襲の被害によって出た死者は二七一九人、焼失率は九十九・五パーセントと知り、数字を見るだけで思わずゾッとしました。そんな調べ学習でも伝わってくる富山大空襲の恐ろしさを、さらに実際に被害を受けた方の講話で改めて痛感し、今の生活の豊かさに驚かすにはいられませんでした。昔の富山と今の富山では、まるで違う世界のような生活をしていただということが分かり、普段の生活へのありがたみを感じました。中学校の修学旅行で、広島原爆ドームを見てから、「こんな風に自分が住んでいる富山の民家やビルが一瞬でなくなったのか」と悲惨な気持ちになりました。このような経験から私たちがどのように社会に貢献していくべきか、戦争をしていた時に生きていた人に対してどう感謝していくべきか



城址公園内にある戦災復興記念像(天女の像)

中学生作文優秀賞

「忘れてはいけない大切な記憶」

富山市立豊岡中学校三年

山村 空大

僕が高校二年生になる二〇二〇年、東京オリンピックが開催されます。ずっと先だと思っていた出来事がもうすぐそこに迫ってきています。もしかすると、競技を見に行き、間近でオリンピックを体験することができるかもしれません。さらに、世界では日本ブームが起きており、外国人の観光客はオリンピックを前に、全国的に増加しているとニュースで聞きました。富山でも三年前に開業した北陸新幹線の効果もあり、多くの外国の方が訪れています。

今年の春、近所の公園にお花見に行ったとき、外国の方を大勢見かけ、とても驚きました。桜が咲き誇る姿に感動し、嬉しそうに写真を撮っている様子がとても印象的でした。松川は富山市を代表する桜の名所であり、日本桜名所百選にも選ばれています。日中も多くの花見客が訪れますが、夜はきれいにライトアップされていて、多くの人が夜桜を楽しみます。僕は川を覆うように咲く松川の桜がとても好きです。特に、松川橋の横にある歩道橋の上から満開の桜を見ると、まるで絨毯のように広がっていてとてもきれいです。また、お花見の賑やかな雰囲気と、花見を楽しむ人の笑顔を見ると、僕まで幸せな気持ちになります。しかし、この桜並木は昭和二十年の富山大空襲で焼け野原となっ

を考えました。すると、三つの考えが浮かんできました。一つ目は、公共の場、そして物を大事に使うということ。二つ目は、食材を大切にし、食べられるものに感謝すること。そして最後に、私が一番大切だと思う、家族や友達を大切にすること。これらの三つの考えは、全て「心の温かさ」を強調しています。「心の温かさ」は、人が支え合いながら生きていくために必要だと、私は思うのです。このことに気づかせてくれたのも、富山大空襲があったからだと思っています。

みなさんが思う「平和」とはどのようなものですか。私は、これからの生活、自分を大切にしてくれる家族、国際問題や日本国内の問題に対する知識を大切にすることだと考えています。人にはそれぞれ個性があり、趣味や特技を生かせるのは、今ある幸せのおかげです。私は、これから富山についてもっとたくさんのおかげです。学び、もっと富山の過去についても調べていきたいと思っています。みなさんも、「平和」について改めて考えてみませんか。

た富山の街の復興を願って、昭和二十五年から数年をかけて植樹されたものだというのを知っている人はどれくらいいるでしょうか。外国人はもとより、富山県民でもこのことを知って桜並木を歩く人は少ないと思います。特に僕たちのような若い世代の人たちは、戦争についても教科書で知るぐらいで、身近な出来事だったことすらも感じづらくなっています。さらに、戦争を知っている方々もお年寄りになられて、話を聞くことがどんどん難しくなっています。戦争が終わって、街がどんどん復興し、時代とともに変わってきました。それでも植えられた桜は変わらずに富山を見続けてきたのだと思います。しかし、きれいに見える桜も、植樹されてから七十年余りが経ち、枝が折れたり中が腐ったりして老朽化が進み、危機的な状況であると聞いたことがあります。僕はこれを聞いて、戦争の記憶と桜は似ているように感じました。どちらも時間が経つと風化が進んでしまいます。ただ違うのは、桜は植え直せばいつか立派な桜となり、また楽しむことができますが、戦争は繰り返すというわけにはいかないということです。悲惨な戦争を二度と繰り返さないために絶対に忘れてはいけない大切な記憶であると思いました。

戦争により大きな傷を負った富山。自然や食など様々な魅力を併せ持つ富山。戦争の記憶を後世に伝え、富山の特有の魅力を広めていく。それが、僕たちにできる富山への貢献だと思っています。

僕は実際に広島を訪れたことで、広島に住む人たちが、過去の悲しい歴史から目を背けず、二度と戦争を起こさないために、多くの活動をされていることを知りました。どんなに修学旅行前に勉強していても、実際に見ないと分か

「平和な未来に向けて」

富山市立豊岡中学校三年

太田 優輝

今の日常生活を当たり前だと感じている僕にとって、報道等で知られる世界の紛争地帯で、現在起きている出来事は、現実のものだとは思えません。しかし、今から約七十年前、僕が住んでいる日本でも、武器を持ち、生死をかけた戦いが行われたという現実から、目を背けてはいけないと感じ始めている自分があります。

僕は、修学旅行で広島に行き、平和学習をしました。原爆ドームや広島平和記念資料館を訪れて、戦争当時の様子を学ぶことができました。原爆ドームでは、当時の建物が、そのまま残っていて、原爆の恐ろしさを実感しました。世界で唯一の被爆国であることを改めて感じ、後世に伝えていかなければならないという思いを強くもちました。広島平和記念資料館では、戦争当時の資料がたくさんあり、戦争の悲惨な様子が伝わってきました。この他にも、平和公園の様々な場所で、慰霊碑等を見ることができ、戦争で亡くなった方々の思いを新たにしました。

僕は実際に広島を訪れたことで、広島に住む人たちが、過去の悲しい歴史から目を背けず、二度と戦争を起こさないために、多くの活動をされていることを知りました。どんなに修学旅行前に勉強していても、実際に見ないと分か

らないこともあると実感しました。平和な世界は当たり前のようだけれど、戦争をしたからこそ、平和を感じられるというのも悲しいことです。今、僕たちに与えられた使命は、戦争の悲惨さを世に伝えていくことだと受け止めました。そして、戦争を起こさない世の中にしていかなければなりません。

富山県に北陸新幹線が通るようになり、飛躍的に便利になりました。しかし、その富山市も七十三年前の富山大空襲で、一万二千七百四十発の爆弾が容赦なく落とされ、ほぼ全域が焼失し、二千七百十九名の尊い命が奪われたと聞きました。この事実を僕は昨年、語り部の佐藤進さんからお聞きして初めて知りました。何もなくなつた状態から、富山市は目覚ましく発展しました。これから、さらに便利な世の中になると思います。

未来が明るくなるために、富山が発展するのは私たちにとってよいことだと思います。しかし、今を生きる私たち一人一人が過去のことにも目を向けなければいけないと思います。未来に生きる僕たちは、しっかりと過去のことを学び、二度と戦争をしないよう、行動するとともに語り継ぎ、平和な世の中を創ることで未来に貢献していきたいと強く誓います。

式典



1. 富山市の紹介映像

2. 国歌斉唱

3. 黙とう

4. あいさつ

富山市長 森 雅志

5. 中学生作文最優秀賞発表

富山市立山室中学校三年 高平 希歩
「これからの平和を祈って」

6. 戦災体験談

作 / 富山市八尾町舘本郷 本多 哲三
朗読 / 声のライブラリー友の会 木谷 千佳子

7. 代表献花及び一般献花

演奏 / レーベン弦楽四重奏団
第1ヴァイオリン 渋谷 優花
第2ヴァイオリン 藤田 千穂
ヴィオラ 高田 愛子
チェロ 富田 祥